

1994年度の教育実践研究指導センター研究プロジェクトの活動について

当センターの研究活動は共同研究を基本に、四分野で行われている。しかし、どの共同研究も必ずしも順調に進行してきた訳ではない。それぞれのプロジェクトの事情により、定期的に研究が進められたところもあれば、殆ど共同の場が持てずに担当者任せになったプロジェクトもある。しかしながら、各プロジェクトとも最終的には何等かの形で研究をまとめた。以下、四つのプロジェクトの活動の概要に目をおしていただき、それぞれの研究論文あるいは報告、記録等をご覧いただければ幸いである。

I 教育実習カリキュラム開発研究プロジェクト

本プロジェクトは「教育実習の改革のための基礎的研究資料」を作成することを目的に附属小、中、養護学校の教員の参加を得てスタートした。一年次は、大学だけでなく附属学校も会場にして研究会を重ねた。結果はセンター紀要4号にまとめた。そこでは、教育実習の基本理念を検討するとともに本学の事前・事後指導の改革構想をまとめている。

二年次は、この改革構想を受けて、教育実習委員会をはじめ教育実践研究指導センターを中心に事前・事後指導の改善が進められた。とりわけ、全実習生参加による「教育実習シンポジウム」を実施した意義は大きい。シンポジウムの内容も概ね好評であった。そこで今回、シンポジウムの内容を整理し記録としてまとめた。

今後の課題としては、教育実習と大学における教科教育ならびに教職教育との関連をどのように進めるのか、また学生の教職志望意識を高める効果的な教員養成の在り方について総合的な研究が必要になっている。

II 教科教育研究プロジェクト

本プロジェクトでの研究は、大きく二つのテーマをめぐってなされた。

一つは、近年、学校週5日制の実施にともなって日程にのぼってきており、先導的試行がなされている教科統合化の動きについて検討がなされた。記号科、表現科などが中心になった。

もう一つは、それともかかわって附属小学校で進められている、教科を越えた授業の試みを素材にした。まだ単発的だが「人間科」「環境科」という意図で試みられた授業を参観し、附属学校の考え方を出示していただき、論議した。

本来であればこれらの成果をセンター紀要にまとめるところだが、教科教育の研究グループは学部内にいくつか存在しており、プロジェクト研究員がそちらのメンバーとして研究をまとめておられるのでここでは掲載を断念した（和歌山大学平成6年度カリキュラム改革調査経費報告書「教科再編・統合と教員養成」1995.3、和歌山大学教育学部平成6年度学内特別研究経費報告書「教育課程再編・統合に関する基礎的研究」1995.3）。また附属小学校のほうも、まだ中間的な時点だということで、まとめは見送られた。ここに掲載する市川の論文は、プロジェクト研究会のたびごとに「教育課程論の観点から教育学の者が報告すべきである」という要求を受けて書いたものであり、まだプロジェクトでの検討を経ていないものである。

Ⅲ 情報教育研究プロジェクト

平成6年11月に和歌山県内の中学校を対象として、「情報基礎」領域及び情報教育全般にわたる実践の実態調査を実施した。質問紙の作成に関しては主に山口が担当しプロジェクト内で検討後、一部修正し各学校に送付した。結果の集計、分析、考察及び数人の情報教育を担当する教師への聞き取り調査は主に野中及び豊田（大学院生）が担当した。

成果としては、和歌山県内の中学校でのコンピュータ導入及び利用に関する状況を概ね把握し、いくつかの問題点を抽出することができた。しかしながら、カリキュラムや授業の詳細については実態が捉えられず、さらに詳しく調査する必要がある。また、今後も継続して数年おきにこうした調査を行うこと、小学校への調査も実施することなどが今後の課題である。

なお、報告書の考察に関しては、プロジェクト内での議論が充分でなく、野中及び豊田が意見交換してまとめたものである。

Ⅳ 学習指導と認知心理学研究プロジェクト

本プロジェクトは障害児教育にかかわる附属養護学校の先生方を中心にしたグループと、中学校国語科教育にかかわる附属中学校の先生方を中心にしたグループの二本立てで進められた。プロジェクト全体にかかわる巨視的研究として、「学習指導に認知心理学を生かす(2)」にまとめた。

(1)「障害児の認知発達」に関する研究プロジェクト

日頃の教育実践を通じて明らかになった障害児の認知様式とその発達の様々な側面について、認知心理学の知見をもとに解釈・分析し、実践的知識の整理を目指した。また、それに応じた指導についても検討した。主に、事例報告とディスカッションを通じて、問題点を意識し、課題を設定していく方法をとった。いくつかの事例をもとに、障害児の認知の問題点として、「行動の意味づけ」が不明確なことに着目し、外的評価・内的評価・目的意識・状況認知の4つの視点から、行動の分析を試みた。しかし、日常的な教育実践の中で、様々な要因をコントロールしながら研究目的にそった実験的指導を行うには、種々の問題がある。今後、教育実践の中から生じた教師の問題意識を再確認しながら、認知心理学の知見との接点の意義を追求していく必要があるだろう。

(2)「作文教育の指導」に関する研究プロジェクト

メディアを活用して、情報収集・処理のスタイルと作文取材力との関係を分析した。学習者（中学生）が、メディアを使って、どのように情報を収集し、取捨選択をしながら、文章表現をしていくのかを分析した。まず、情報収集の段階で、メディアからどのようなことを知ったのか、どのようなことが印象に残ったのか、どんなことを書きたいか、等を調査した。また、情報処理段階において、書いた文章にどんな収集材料を生かし得たのか、等を調査した。その結果、情報収集における選択的認知と適切な比較が学習者の認知の深まりをもたらし、文章産出作文に反映することが見い出された。そうした意味で、メディアを利用した作文教育の意義とそのあり方に一石を投じたといえる。研究成果は、「メディアを活用した作文指導の試み」としてまとめた。